

9. 泉自然公園探訪



↑ 早春のモモの木の下で。

→ 林内に咲くカタクリ。



← 池にすみついたカルガモ。↓ 晩秋、紅葉に映える斜面林。



900種をこす植物、50種もの野鳥がくらす自然公園



↑公園入口のトチノキは、夏がくると大きな果実をつける。



→池のほとりで、楽しいバード・ウォッチング。

泉自然公園は1969(昭和44)年に、市民の憩いの場として開園されました。開園後、谷津田を渡る「いずみ橋」、上池、中池、下池、動物小屋などが作られ、植樹が行われて整備が進み、市民の公園として愛され今日に至りました。

一本松広場、お花見広場などの広大な草原があります。総面積は2.8ヘクタール、草花が植えられ、サクラの種類もいろいろあり、草原を囲む林は訪れる人の心を和らげてくれます。

また、この公園は起伏に富んだ地形を利用して作られ、歩道に沿って歩くと、スギ、ヒノキなどの針葉樹の林、クヌギ、コナラ、イヌシデ、ムクノキなどの落葉樹にシラカシなど常緑広葉樹のまじった雑木林などが見られます。「外来樹林の広場」には、外国産樹林や各県を代表する樹木が植樹されており参考資料園としての役割を果たしています。

樹木と野草の種類は、自生種と植栽種をあわせると927種が数えられます。このような植物の豊富さは昆虫類や野鳥のよい生活場所となっています。

自然の開発が進んでいるなかで、この公園は首都圏近郊緑地保全地域内にあり、都市の環境を支える裏山にあたります。訪れる人たちに「自然」をよりよく理解してもらえよう、コースに沿ったガイドを記します。

①トチノキの並木道

公園の入口にはトチノキの並木が門がまえを作っています。もともと寒い山地の地方の木ですが、ここでもよく成長しています。本来、樹高20m、直径1.5mほどにのびるといいますから、まだこれから大きくなることでしょう。5月、若葉をつけた枝に、白味をおびた花が円錐状にたくさん集まって咲きます。葉の成長は速く、6月には長さ60cmほどにもなります。扇を広げたような広い葉は日陰をつくり、真夏には涼感を覚えさせてくれます。

8月になると、丸形のうす茶色の大きな果実がつ

き、9月上旬には地上に落ちます。拾って果皮の裂け方、中の種子の数、大きさなどを見てみましょう。種子にはでん粉質が多く含まれていて食用にされています。芭蕉の「奥の細道」に、この実を拾って食べるということが記されています。(p.117の図、参照)

②サクラの木が多いお花見広場で

お花見広場のよい時期は、やはり春です。面積0.85ヘクタール。一面芝生におおわれ、中心部にヒユウガミズキ、ハナツクバネウツギ(アベリア)など、周辺部にはアジサイが植えてあります。

3月中旬には、道路側にあるカンヒザクラ(寒桜、ヒカンザクラともいう)がまず開花します。花卉は緋色で全開せず、つりがね状に垂れます。中国南部原産、沖縄の「サクラ祭」はこのサクラが主役です。

3月下旬から咲くものは公園や街路樹としてもふつうのソメイヨシノ(染井吉野)、シダレザクラの母種であるエドヒガン(江戸彼岸、アズマヒガン)、八重咲きのサトザクラ、東日本に多く自生するヤマザクラなどがあります。わずかですがオオシマザクラも見られます。

花だけに気をとられずに、植え込みの中にも目を向けてみましょう。ヤブガラシ、ヘクソカズラのほかにカタバミ、ハコベ、イノコズチ、セイヨウタンポポなどなどが見つかります。サクラの花の時期に、花の咲いている雑草の種類をさがすのも楽しいものです。

③一本松広場とスギ林の見どころ

一本松広場は1本のクロマツがシンボルです。この広場は「お花見広場」より少し広く、イヌシデ、エノキ、クリなどの落葉広葉樹の帯状の樹林で2つの芝生の広場に分けられています。

道路側の芝生地には、シダレザクラ、エドヒガン、ソメイヨシノが植えられ、ここでもサクラの観察ができます。

◎泉自然公園ガイド

【泉自然公園への交通】 JR 千葉駅前からバス
⑭番のりば、京成バス、成東駅、または中野操
作場行、「泉自然公園入口」下車。徒歩 10 分。



●利用案内

【入園料】 無料

【開園時間】

4～9月 午前 8 時 30 分～午後 5 時 30 分

10～3月 午前 8 時 30 分～午後 4 時 30 分

【団体利用】 あらかじめ事務所へ申し込み、
了解を得てください。(大形バスの乗り入れ
は、日曜、月曜、祭日はできません)。

【売店】 パン、牛乳、清涼飲料、くだもの、菓子類の販売。
乳田車、車いすの貸し出しを行っています。

【お問い合わせ、お申し込み】

千葉市 泉自然公園事務所 (千葉市野呂町 108)

電話 (0472) -28-0080

スギ林 一本松広場の西側には、樹高が高くそろうたスギ林があります。高さは13mほど。中に入るとスギの幹がきれいに並んでいます。人の手で植えられた林だとすぐわかります。

林縁の木は下の方まで緑の葉をつけていますが、林内に入ってみると下の方の葉は枯れて無くなっています。さらに林の奥では枝は枯れあがり、頂上の方だけに葉のついているのがわかります。スギは日光を求めてお互いに競って成長しているのです。幹の太いもの細いものがまじっているのは木どうしの競争の結果なのです。暗い林内でも光のさし込むところには下草が多いのがわかるでしょう。

林の中にモウソウチクが入りこみ、スギの光を横どりしたところがあります。そんなところではスギは枯れてしまい、中が明るくなるにつれて侵入してきたニワトコ、ヌルデのような樹木のほかに、草本のチヂミザサ、ヌスビトハギ、イノコズチなどがみられます。

④広い芝生地とその周辺の林

泉自然公園の中でもっとも広い芝生地で、「草原」と呼ばれるこの広場は、家族連れや団体客に格好の憩いの場所となっています。この大きな芝生地を維持管理していくには陰の苦労があります。年間7～8回も芝刈りを行い、め土、肥料、除草などをしなくてはなりません。利用の激しい芝生を放っておいたのでは、いい状態が保てません。

この芝生地の周辺部には300株ほどのサクラやスギで作られた美林があります。ここでもまたサクラを見ることができます。ヤマザクラはソメイヨシノよりやや遅れて咲きます。花はうすい桃色で気品があり、うす茶色の葉も同時にのびてきます。数多いサクラの中でも日本を代表するサクラといわれます。オオシマザクラは、ヤマザクラに似ていますが、花は、白色でやや大きく、葉には香りがあります。園内には数が少ないですが、さがして両方を比べてみま



↑お花見広場のエンドヒガンの花。

↓スギ林に入りこんだモウソウチク。

→下の池で休息するカモ類の群れ。



しょう。

サクラの植えられたところよりもさらに林内に入ると、雑木林の周りにフジ、クズなどのつる植物が観察できます。つるの成長方向が時計まわり(右巻き)にはいあがっているのか、反時計まわりか(左巻き)かも調べてみましょう。

⑤「いずみ橋」から見える斜面の林

「いずみ橋」は長さ60m、幅3mの吊り橋で1971年に完成しました。駐車場からおりて、橋の右手下を見ると、大きなマゴイとヒゴイが泳いでいます。このコイは、人が近づくと餌にありつくと知ってか集まってきます。足音などで「学習」しているからです。

この橋の右手と左手に発達している斜面林は、千葉県にふつうに見られる雑木林で、おもに落葉樹でできています。泉自然公園の代表的な自然景観です。40年ぐらい前まではときおり伐採され、薪炭(しんたん)の材料として利用されてきましたが、そんな燃料が不要となった今では、自然のままに保たれている林です。

橋の右手(西方)に続く斜面の一部で、この林のようすを観察してみます。

クヌギ、コナラ、イヌシデ、ムクノキ、エノキ、ゴンズイ、ムラサキシキブ、ガマズミ、ニワトコのような落葉樹にイタジイ(スグジイ)、シラカシなどの常緑樹、それにアカマツがまじっています。雑木林のつ

くり出す春の新緑、秋の紅葉はこの自然公園が市民に贈るすばらしいプレゼントでしょう。

⑥「下の池」に集まる水鳥たち

公園の西方にある「下の池」は水鳥の集まる場所です。

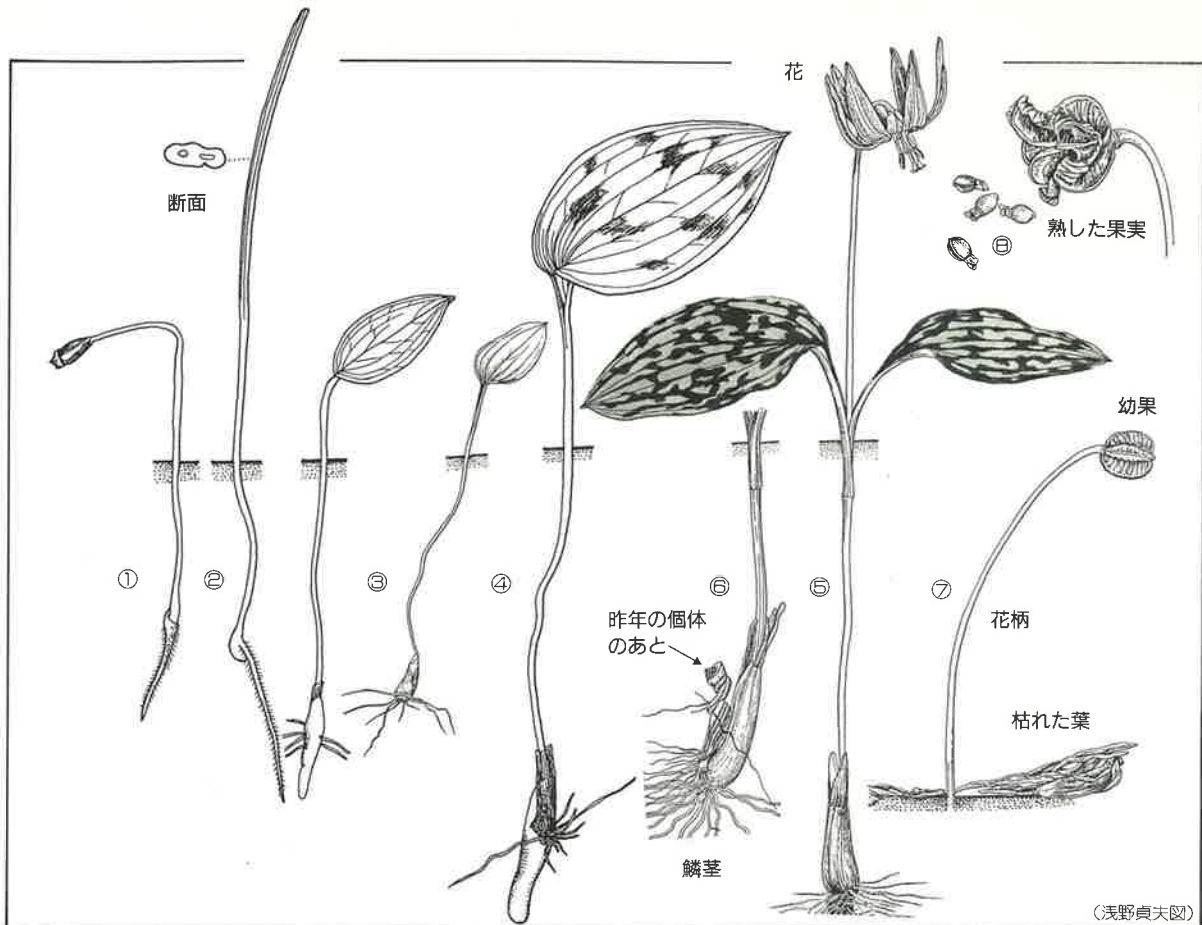
いつ行ってもアヒルとコブハクチョウがいますが、これらは公園で飼育して放したものです。昔、放したオシドリはいつのまにか姿を消してしまいました。

留鳥のカルガモもまた年中見られる水鳥です。ときおりカイツブリがいますし、またカワセミを見ることができます。

晩秋から冬季にかけて、北国から飛来する冬鳥の姿があります。とくにマガモの群れは数百羽にもなり、カルガモとまじったようすは壮観です。晴天の日には鳥たちは陸にあがって休息をしています。

飛来してくる水鳥にはコガモ、オナガガモ、トモエガモもいます。

千葉県野鳥の会の会員が、「泉自然公園の野鳥」というしおりを発行しました(1986年)。それには、ウグイス、ヒヨドリ、メジロなどの留鳥、ツバメなどの夏鳥、カシラダカ、ツグミ、マガモなどの冬鳥など、総計50種類も鳥が記載されています。安全な公園が豊富な鳥の種類を招いているのでしょう。



(浅野貞夫図)

⑦カタクリの生活をさぐる

カタクリは、落葉樹林の林床に生育して、春さきの短い期間に明るい光を利用して生活する植物です。千葉県内では3月上旬に出芽し、急速に成長して4月上旬には開花します。下旬から5月上旬には、果実を残して地上部は完全に姿を消すという短命な植物(春植物)です。

近年、道路建設、宅地造成や乱獲などで、千葉市内でも減少の一途をたどっています。雑木林でも温度の低い北斜面を選んで生育し、環境の変化にはきわめて敏感です。「人工を拒否する自然の象徴」といえるかもしれません。そんなカタクリを掘り採って、自分の庭に植えてみても長くは持ちません。種子から育成し、それなりの環境を用意してやればどうにか成功します。それでも開花までに10年前後の歳月がかかります。

1973(昭和48)年に、種子を千葉市内で採集し、その年の5月22日、深底の素焼きの鉢にまきました。その翌年の春に芽がでました。それから12年後の1985(昭和60)年に開花しました。その間の記録が上の図です。

カタクリの生長記録

① 1年目に発芽 (3月14日のスケッチ)。地上部は細長い円柱状の子葉。長さ約3 cm。光沢のある緑色。地下部は白色。少しふくらんだ根と根毛がある。

② 1年目の発芽後(3月30日のスケッチ)。子葉は成長して偏平状、長さ5 cm。形はニラかノビルを思わせる。地下部に白色の幼い塊茎がつくれる。5月上旬、地上部は枯草色になって枯死、完全に姿を消す。

③ 2年(左)と3年(右)目の幼体(それぞれ4月上旬にスケッチ)。カタクリらしい葉形となる。葉面にはまだ斑紋なし。葉身長は約3 cmで葉柄とともに緑色。地下部には、個体により直立した塊茎のもの、若い鱗茎をもつものがある。5月上旬、地上部は枯死し姿を消す。

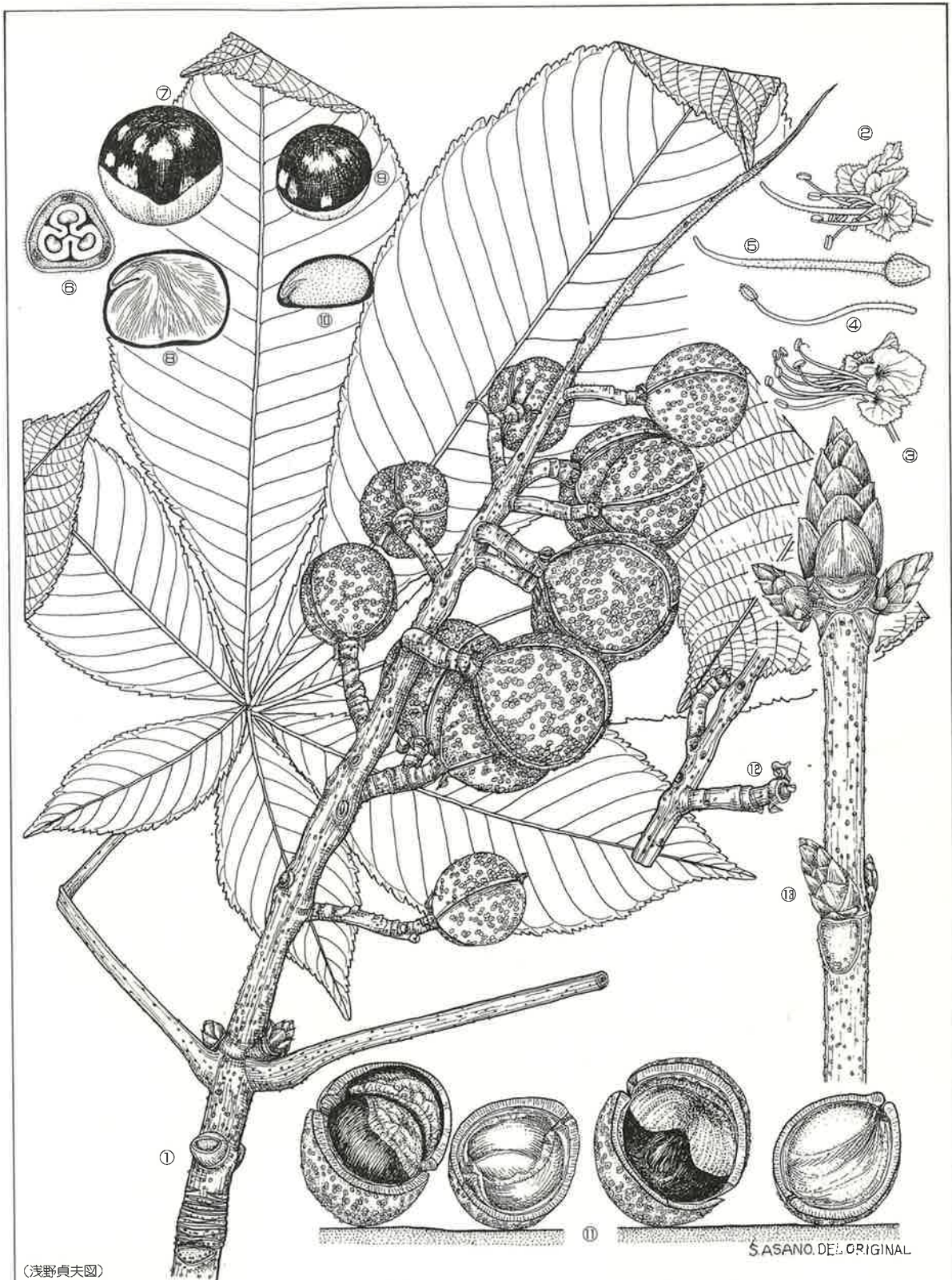
④ 4年目の植物体(4月20日のスケッチ)。葉身長は約6 cm。斑紋が現れた。地上部よりも地下部が長い。

⑤ 12年目に開花した個体(4月10日のスケッチ)。2枚の葉がでた翌年の12年目に開花し、種子をつけた。地下部は白色で細長く、長さ10 cm。

⑥ 開花後の鱗茎 養分を貯えた鱗茎にはいろいろな形があり、図はその一つである。前年の個体が枯死した根跡が、鱗茎に残存している。

⑦ 花の終わった後(5月上旬)。葉は枯草色になり枯死し、地表にある。花柄は淡黄褐色となり、先端に幼果をつけて傾く。

⑧ 熟した果実が種子を落とすところ 花柄は地上にたおれる。果実は3裂し種子を落とす。種子の長さは約5 mm。黄色がかった赤色で、表面に細かい不規則な縦じわがある。(浅野貞夫)



(浅野貞夫図)

トチノキ 北海道から九州北部までの山地に自生するが、千葉県内に自生のものはない。セイヨウトチノキ（マロニエ）はトチノキの仲間。

トチノキ詳図

- ① 果実をつけた枝と葉。
- ② 花（雄しべと雌しべをもったもの）。
- ③ 花（雄しべだけをもったもの）。
- ④ 一本の雄しべ。
- ⑤ 雌しべ。

- ⑥ 子房の断面。
- ⑦ 種子。⑧ 種子の縦断面。
- ⑨ 種子。⑩ 種子の縦断面（形が違う）。
- ⑪ 地上に落ちて実がはじけたようす。
- ⑫ 葉の落ちた枝の先端。
- ⑬ 冬芽（つやがあってよく粘る）。